

「英語語法学」確立のために

柏野健次

1 はじめに

まず、30 数年前のエピソードから稿を起こすことを許していただきたい。

私は 1971 年の秋に大学院の入学試験を受けたが、そのときの面接で「大学院で何を勉強したいか」という質問をされた。それに対して私が「語法を研究したい」と答えると、文学専門のある教授に「語法は Question Box などに見られるように雑多なものの集まりで学問ではない」と一蹴された。すると、以前、語学を担当したことのある他の教授から「君の言う語法とは英語で言うとか何か」と尋ねられ、「usage です」と答えると、その教授は納得してくれた。ここから分かるように、当時から学問としての語法研究の地位は低いものであった。

本稿は、語法研究を学問にまで高めるには何が必要で何を目指すべきかを検討し、「語法学」確立のための礎を築くことを目的とする。

2 語法研究の 3 つのタイプ

一概に語法研究と言ってもさまざまな種類のものが含まれる。人それぞれに語法研究の捉え方が違うからである。以下では、3 つのタイプの語法研究について概観する。

2.1 例文を提示するだけの語法研究

「ペーパーバックを読んでいたら、珍しい用例を見つけた」式の例文を提示するだけの作業を語法研究と呼ぶことがある。これは出発点である資料を提供しただけであって研究とは言いがたい。その例から独自の結論を帰納していく態度こそが大切である。

例文提示のように誰が行っても同じ結果が得られる「研究」というのは、少なくとも人文科学にあっては学問ではない。例文収集に際して、近年はペーパーバックを自分の目で読むより、Database を使う人が増えてきているが、これも同工である。たとえ、どのような統計処理をしようとも、それはマニュアルに従って行っているだけであって、学問とは言えない。学問にこそ個性が必要なのである。

2.2 辞書・教科書の記述に似た語法研究

よく辞書や教科書のような書き方になっている「論文」を見かけるが、専攻論文では読者を啓蒙する必要はない。例えば、仮定法を語法的に研究する場合に一般的な仮定法の用法についての概説は不要である。その程度のことは読者は分かっているものとして論を進めないといけない。また、先行研究と称して、他の文献に書いてあることを並べ立てるだけで語法研究になると誤解

している向きもあるが、これは論文とは呼ばずレポートでしかない。

こういう人に限って、海外の学者の意見を無批判に鵜呑みにする傾向がある。一般的に言って、日本の学者は海外の著名な学者が「AはBである」と言えば、こぞって「右へならえ」をする。明治以来の舶来上等の名残りだろうか。

2.3 自分の意見まで述べた語法研究

2.1節と2.2節で見た語法研究の最大の欠陥は originality の欠如である。私たちは、実例 (Database を含む) を検索し、インフォーマントを活用し、さらに各種文献に当たった上で、自分の頭で考え抜き、結論を絞り出していく必要がある。こういう方法論的に生じる語法研究こそが本当の意味での語法研究である。

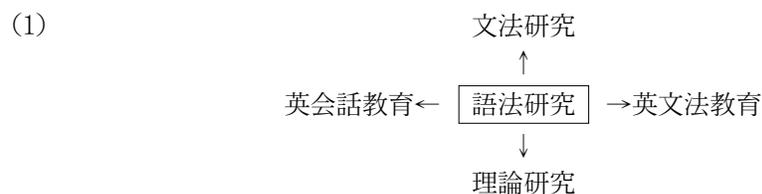
ネイティブ・スピーカーは無意識のうちに正しく言葉を操っているが、語法研究の任務は、そのネイティブ・スピーカーの無意識の領域に踏み込んでいき、それを解明していくことである。ネイティブの無意識はもちろん、彼ら自身には分からない。ここに外国語としての英語を研究することの意味がある。¹⁾

ネイティブ・スピーカーは、「こういう言い方はできるか、できないか」という問いには容易に答えられるが、「なぜか」と質問されるとたちまち困ってしまう。例えば、ネイティブに *She suggested *to go to the zoo*. と言えるかと尋ねると、すぐに No と答えて She suggested *going to the zoo*. と訂正してくれる。しかし、「bus では *get on the bus* と言うのに car では、なぜ *get into the car* と言うのか」という質問をすると彼らは答えに詰まることが多い。英語を勉強した日本人なら、これが乗り物の大きさの違いに起因することは周知のことだろう。

これは話を日本語に置き換えてみればよく分かることである。私たちは「その驚いたの新記録にランナー」という日本語が間違いであることはすぐに気づくが、なぜ「誰は来ましたか」とか「来たのが誰ですか」と言わないのかと聞かれると言語学を勉強した人でない限り、即座に答えられないだろう。こういう質問には外国語として日本語を研究している人のほうが答えられることが多い。²⁾ 岡目八目という言葉があるように外から言語を眺めたほうが見えてくるものが多いのである。

3 隣接分野との関係 (文法、理論、教育、会話)

この節では、語法研究に隣接する分野にはどのようなものがあり、どういうつながりが見られるのかについて検討する。私見では、語法研究は以下の領域と関連しているように思われる。以下、この順に1つずつ、考察していく。



3.1 文法研究との差異

文法研究というのは、例えば、仮定法、関係詞、完了形というような文法範疇に属する項目を種々の観点から研究することである。これに対して、語法研究とは、例えば high と tall の違いとか、give の統語的、意味的、あるいは語用論的な特徴を明らかにするというものである。ここから分かるように、語法研究は文法研究よりも個別的、具体的でミクロ的である。

私の恩師の小西友七先生は「文法は文の文法で、語法は語の文法のことである」とよく言われるが、まさにその通りだと思う。その結実したものが『英語基本動詞辞典』(研究社)をはじめとする語彙文法シリーズの3巻である。『英語基本動詞辞典』を見ても例えば、進行形一般の用法は分からないが、特定の単語が進行形で用いられたときの諸特徴が鳥瞰できる。

文法と語法は「文法はルールを探るものであるのに対して語法は傾向を探るものである」という点で異なる。したがって、例えば「状態動詞は進行形では用いられない」という文法規則を立てたにもかかわらず、She was *loving* every minute of it. (D. Steel, *Dating Game*) という実例が示されれば、それは反例になるし、この規則に対しての反論になる。それを「love の進行形」というテーマで、「love はどういう場合に進行形で使えるのか」を解明していくのが語法研究の仕事である。

一方、ある語法を研究してその結論を出したあとに、反例がたとえ1つや2つ存在していることが示されても、それは決定的な反論にはならない。語法はパロールを対象とする以上、容認性に揺れが見られることは常にあるからである。絶対的なルールではなく、1つの傾向を探っていくのが語法研究なのである。

3.2 理論研究との関係

語法研究はよく理論研究と対比される。ただ、両者は対立するものではなくて、お互いに補完し合うものである。語法研究は、理論研究が一般化を急ぐあまりに切り捨てていった、あるいは過度に単純化していったものを再検討し、言語記述のなかに改めて組み込む役目を担っていると言える。

例えば、1970年代、変形文法が華やかだったころ、for-to complementizer という用語が使われていた。「for NP + to VP」というパターンを指してそのように呼んでいたが、私は1978年の拙稿(「It-for-to」構文論)で、「It-for-to」構文においては、形容詞が難易(easy, difficultなど)を表す場合にはこのパターンが崩れ、for NPは動詞句ではなく、形容詞と結びつくことを明らかにした(柏野(1993:126-138)に所収)。例えば、次の文では、述語にdifficultがきているため、for Kellyはdifficultと結びつき、全体は(「ケリーが集中するのは難しかった」ではなく、「集中するのはケリーにとって難しかった」と解釈される。

(2) It was *difficult* for Kelly/ to concentrate. (S. Sheldon, *Are You Afraid of the Dark?*)

ここでは、語法研究はfor-to complementizer という用語が作られたことによって切り捨てられた言語事実を拾い上げ、そしてそれを解明した上で、改めて言語記述のなかに組み込むことに

貢献している。

また、1977年の段階で Bolinger (1977) は当時の変形文法には、2つのタイプの誤りがあると指摘した(中右実訳『意味と形』の「訳者はしがき」を参照)。1つは「違うものが同じと見られている場合」であり、もう1つは「同じものが違うと見られている場合」である。前者には能動態と受動態の同一性など(実は、The stranger approached me. と I was approached by the stranger. は affectedness の点で意味が異なる)があり、後者には指示代名詞 that と接続詞 that の区別(実は、接続詞の that は旧情報を表すという点で指示代名詞の that と同じである)などがある。

Bolinger 氏は、このように当時の理論研究が目を向けなかった箇所に光を当て言語記述の精密化に努力を惜しまなかった学者である。また、氏はネイティブ・スピーカーでありながら、インフォーマント・テストを実施したり、ラジオから用例を採取するなど、極めて優れた語法研究の実践者でもあった。

この2つの例から分かるように、当時の変形文法の研究は統語論中心で細かな意味の差異にまで目が行き届かなかったのである。

3.3 英文法教育との連携

語法研究は英文法教育と密接な関係がある。語法上の発見は英文法教育と結びつき、明日の授業からでも役に立つからである。ただ、過去を振り返ってみると、残念ながら「私たち(若い人も含めて)が受けてきた英文法教育というのは完全に正しいものだった」と胸を張って言うことはできない。したがって、私たちは自分たちが教えられたように教えてはまた同じ間違いを繰り返すことになる。この「教えられたように教えるな」という大テーゼを守るためには、以下の3点を心に刻み込む必要がある。

- (3) A 英語の変化に敏感であれ。(教育界でよく知られている知識だが、その妥当性が時代とともに変わってきている)
- B もっとよく英語を知れ。(教育界であまり知られていない知識)
- C 間違っって教えられたことを繰り返すな。

3点とも語法研究の成果を取り入れることにより解決できる。語法研究は英文法教育の改善に役立つのである。以下、A, B, Cの順に具体例をいくつか挙げていこう。

[A - 1] as if のあとは仮定法か

1971年に発行された高校生向けの英語の参考書に次のような入試問題が載っている。

- (4) 誤りを正しなさい。He looks as if he suspects something.

その参考書の解答は「suspects を suspected に訂正する」となっている。

しかし、(4) は正しい文である。「彼が何かを疑っている」という状況は想定可能であり、そう

いう場合には as if 節に直説法（現在形）を使うことができるからである。

以下、この「状況の想定可能性」という考え方について少し述べてみよう。定評ある英文法の概説書である Murphy（2004）に次のような例が載っている。

(5) Do you hear that music next door? It sounds *as if* they *are* having a party.

(6) You meet Bill. He has a black eye and some bandages on his face.

You say to him: You look *as if* you've been in a fight.

これらの例では「パーティをしている」とか「けんかをした」という状況は想定が可能であり、そのため、as if 節に直説法の現在形や現在完了形を使うことが可能となっている。

しかし、最近では、次のように状況が想定不可能で、「反事実」（counterfactual）を表すとして考えられない場合でも直説法の現在形や現在完了形が使われることがある。

(7) “You're not my daddy,” she said heatedly. “Sometimes you talk to me *as if* you *are*.”
(J. Collins, *Deadly Embrace*)

(8) Martha: Are you ill?

Agnes: Yes.

Martha: What do you feel?

Agnes: I feel *as if* I've eaten glass. (*Agnes of God* [映画台本])

(7) や (8) では、「あなたが私の父である」という状況や「ガラスを飲み込んだ」という状況は想定できない。したがって、これらは「反事実」しか表さない。にもかかわらず、ともに直説法が使われている。

この (8) については、あるアメリカのインフォーマントは (9) のように述べている。

(9) I would prefer subjunctive “I'd” = “I had” instead of “I've”. The indicative “I've” would be quite common, though, I think: many people don't like to use the subjunctive in such a case, or *don't know how to use it*, or think it's too formal or old-fashioned maybe.

彼はこのなかで「ネイティブ・スピーカーのなかには as if 節に仮定法を使うというルールを知らない人がいる」と付け足しているが、これは驚くべきことである。近年、仮定法衰退の傾向が指摘されているが、この点もその一因となっているのであろう。³⁾

[A - 2] I am going to be twenty next month. は間違いか

日本で発行されている文法書や英和辞典のなかには、単純未来を表す場合に be going to を用いて *I am going to be twenty next month.* のように言うことはできないとしているものがある。その理由は以下のようなものである。

(10) a. 年をとるのは本人の意図とは関係がない。

b. 人の意志・意図が介入する余地のない未来には be going to は用いない。

しかし、次の例が示すように、これは英米を問わず、完全に確立した語法である。

(11) “I’m going to be twenty years old next year.” (J. Rossner, *August*) [アメリカの小説]

(12) Ann is going to be 12 next week. (Coe (1995)) [イギリスの文献]

それでは、単純未来を表す場合、be going to と will とはどのように違うのだろうか。

単純未来を表す be going to は、Kashino (2005) で述べたように、「話し手の感情」が移入されるときに好んで用いられる表現である。例えば、How old are you? と聞かれたら I will be twenty next month. と答えるのが普通で、I’m going to be twenty next month. とは通例、言わない。この場合は客観的に年齢を計算しているだけだからである。

逆に、次のように、話し手の賞賛などの感情が関与するときは will よりも be going to のほうが用いられる傾向がある。

(13) My grandfather will / is going to be 100 years old next month. Don’t you think it’s great?

ここに単純未来を表す be going to の存在理由があると言える。

[B - 1] Will/Would you...? と Can/Could you...? の違い

私は中学のとき (1960 年代前半)、次の 3 つの文は依頼を表し、この順に丁寧な表現になると教わった。

- (14) a . Will you open the door?
b . Won’t you open the door?
c . Would you open the door?

しかし、どれも丁寧な表現ではない。まず、(14b) は久野 (1977) が述べているように「拒否されることを予想したとき、あるいはすでに一度拒否された後に用いられる、しつこい、なじる気持ちの入った依頼形で、... 丁寧さを欠く」のである。

次に実例を挙げるが、(15) では一度、Will you ...? と言って拒否されたあとに、Won’t you ...? を使っている点に注意したい。

- (15) Mrs. Robinson: Benjamin?
Ben: Yes?
Mrs. Robinson: Will you unzip my dress?
He steps back.
Mrs. Robinson: I think I’ll go to bed.
Ben: Oh. Well, good night.

Mrs. Robinson: *Won't you* unzip my dress?

Ben: I'd rather not, Mrs. Robinson.

(*The Graduate* [映画台本])

なお、鷹家・林 (2004) の 103 人のインフォーマント調査では、依頼の意味で *Won't you...?* を使うと答えた人はアメリカで 74%、イギリスで 46% となっている。意外とパーセンテージが高いが、これは、「丁寧さを欠く表現でも使うことがある」という意味に解釈したい。

(14a) と (14 c) の *Would/ Will you...?* は依頼というよりも「... 下さい」と相手に (職務上する義務のあることや頼む権利のあることを) 指示するときに使われる表現である。通例、言われたほうは *No* とは言えない。

(16) When Kelly returned to the lobby of her hotel, she walked over to the desk. "I'm checking out," she said. "*Would you* please get me a reservation on the next plane to Paris?" "Certainly, Mrs. Harris." [ホテルの客がフロントの受付に]

(S. Sheldon, *Are You Afraid of the Dark?*)

(17) "*Will you* come this way, please?" [レストランのボーイ長が客に]

(S. Sheldon, *Morning, Noon and Night*)

これに対して、*Could/ Can you...?* は依頼を表し、丁寧な表現である。したがって、次のように、知らない人に道を聞くような場合には、指示を表す *would* や *will* ではなく、依頼を表す *could* や *can* を使うのが普通である (さらに詳しくは、柏野 (2002) を参照)。

(18) "Excuse me. I'm lost. (中略) *Could you* tell me how to get to the Holland Tunnel?"

(S. Sheldon, *Are You Afraid of the Dark?*)

[B - 2] look と see の意味のつながり

look と see の意味の違いはよく問題にされるが、この 2 つの動詞間の意味の関連性については、あまり触れられることはない。look はある方向に意識的に目を向けることを表し、see は目を向けた所で何かが自然に目に入ってくることを表すが、何かに視線を向けてから実際にそのものが見えるのだから、用いられる順序は look → see となる (柏野・吉岡 (2004)、詳しくは柏野 (1993) を参照)。

(19) She *looked* down and *saw* Fast Eddie walking quickly to a helicopter about a hundred yards away. (H. Robbins, *Descent from Xanadu*)

ただ、look は視線を向けることしか表さないから実際に何かが見えたかどうかは不明である。したがって、look したあとでも see していないことを明示して、次のように言うこともできる。

(20) I *looked* down, straining my eyes to pierce the darkness, but I *could see* nothing.

(H. Robbins, *The Adventures*)

(21) Now he was *looking* at a book without *seeing* the words. (U. Hall, *Secrets*)

この (20) と (21) の文を見て、何のことか理解できず、戸惑う生徒・学生が多いのではないだろうか。⁴⁾

look と see に関しては意味の差異だけでなく、このような 2 つの動詞の意味のつながりにまで踏み込むようなきめの細かい指導が必要である。

[C - 1] close the door behind him と「後ろ手にドアを閉める」

私はこの表現を「後ろ手にドアを閉める」と習ったし、実際、ある時期までそのように教えてきた。しかし、『ユース・プログレッシブ英和辞典』(小学館)の behind の項に「後ろ手で閉めるという意味ではない」という記述があり、それが私にとっての Eye opener となって調べてみた。

アメリカ人のインフォーマントによると、これは「部屋の中に入って、あるいは外に出てドアを閉め、ドアを背にして歩いて行く」という意味で、「後ろ手にドアを閉める」の意味ではないという。次例参照。

(22) He *closed the door* of his office *behind him* and walked over to his desk and sat down heavily. (H. Robbins, *The Dream Merchants*)

(23) For a moment he stared at her, then he turned stiffly and walked to the door. He *closed it behind him* softly and quietly walked down the hall to the elevator. (*ibid.*)

したがって、He *locked the door* behind him. (S. Sheldon, *If Tomorrow Comes*) や He *slammed the door* behind him. (H. Robbins, *Goodbye, Janette*) などの表現も可能である。もし、close the door behind him が「後ろ手にドアを閉める」という意味を表すのであれば、この 2 つの例は「手を後ろに回してドアに鍵をかけた」「手を後ろに回してドアを強く閉めた」という意味になるが、これらの解釈は明らかに奇妙である。なお、同じインフォーマントによると、「後ろ手にドアを閉める」というのは I closed the door behind my back. あるいは I reached behind me and closed the door. と言うとのことである。

このようにして、『ユース・プログレッシブ英和辞典』という語義を大切にする辞典のお蔭で新しい事実を 1 つ、発掘できたわけである。

[C - 2] as soon as possible と「できるだけ早く」

関口敏行著『アメリカ発「英語のつぼ」速習法』(講談社, 2002) に「as soon as possible は『できるだけ早く』よりも『可能な限り今すぐ』といった強い言葉」という記述があり、これがまた私にとって Eye opener となった。私自身は as soon as possible は「できるだけ早く」という意味だと習ったし、どの英和辞典を見てもそのように書いてあるからである。

まず、アメリカ人のインフォーマントに「Please reply to my email *as soon as possible*. の as

soon as possible は urgency を表すか」という質問をしてみた。回答は yes ということであったが、これに対して as soon as you can は相手に時間的な余裕を与え、as soon as possible よりも丁寧な言い方になるという。別のアメリカ人のインフォーマントも同様に、as soon as possible は more urgent で命令を表し、「至急」という意味になるのに対して、as soon as you can は丁寧なお願いをしている感じで、「できるだけ早く」という意味を表すという。

次に実例に当たってみると、アメリカの小説に (24) のような例が見られた。urgent という語の存在に注意したい。

(24) “Lawson must have told him where I’d been staying. He left a message for me to call him *as soon as possible*. Said it was *urgent*.” (S. Brown, *The Switch*)

また、2003 年のアメリカ映画 (The Hunted) のなかに、ある人が重傷を負い、駆けつけた人が救急車を呼ぶ場面があるが、そのとき ASAP (エイサップ) というアクロニムが使われていた。これは as soon as possible よりもさらに緊急度が高く、「大至急」という意味である。

以上から上記の関口氏の記述は正しく、私を含め多くの人々が as soon as possible の意味を誤解したまま覚えていることが明らかとなった。

[A, B, C に共通] have to と「... にちがいない」の意味

1967 年発行の受験参考書 (使用したのは 1981 年版) に次のような誤文訂正の入試問題が載っている。

(25) He *has to* be an old man, because he was born in 1880.

この解答には、『『老人にちがいない』と解さなくては because 以下に意味が続かない。have to = must は必要を示すときだけで、推測を示すのに have to を用いることはできない (原文赤字)。したがって、has to を must に訂正する』との説明がある。しかし、(25) の文は (当時からの時間の経過を考えて 1880 年を 1920 年などに変えると) 英語として正しい。⁵⁾

have to に「... にちがいない」という意味があるのは今ではよく知られているが、私は 1972 年に Quirk et al. (1972:102) の衝撃的な次の記述に出会うまでは、この意味を知らなかった。

(26) have to: Logical necessity There *has to* be a mistake.

日本では、『英語教育』誌の QB で、この問題が 1980 年頃に取り上げられ (例えば、1980 年 6 月号や 11 月号)、この頃から英和辞典 (『アンカー英和辞典』(第 2 版) 1981 年など) にこの意味が載り始めた。QB によると、当時は英国の例は珍しかったようである。

今回、改めて自家製の Database を使って英米別にこの意味を表す have to を検索してみた。「... にちがいない」という認識的な意味では主語は無生物で動詞は be であることが多い点を考慮に入れて、there has to be と入力してみると、アメリカ英語 (最近 10 年間に発行された小説。140 万語) で 11 件、イギリス英語 (120 万語) で 9 件がヒットした。ここから、「... にちがいな

い」の意味を表す have to は英米を問わず用いられている表現であることが分かる。

なお、OEDによると、この語義の初出は1967年であるが、Quirk et al. (1972) の出版年を考えるとこれはあまり信憑性がない。実際、手元には以下のような1925年のアメリカ英語の例がある。

(27) There *has to* be somebody to pay for a lunch. (W. Cather, *The Professor's House*)

以上、語法研究と英文法教育の連携について、(3) の A, B, C を1つずつ検討してきたが、もちろん、語法研究ではなくて文法研究の成果がそのまま現場で生かされることもある。文法研究の成果というのは、ある事項を生徒・学生に単なる丸暗記ではなく、なぜそうなるのかを説明した上で覚えるように指導するときに役立つからである。

私は中学のとき(1960年代前半)、must not は「... してはいけない」という意味で don't have to は「... しなくてもいい」という意味だと教わった。これは正しいが、誰もどうしてそうなるのかについては教えてくれなかった。

これは「not のかかる位置が違う」ということで説明できる。専門的に言うと、You must not go. は You must [not go]. と分析され命題否定 (It is necessary for you *not* to go.) であるのに対して You don't have to go. は You [don't have to] go. と分析され法性否定 (It is *not* necessary for you to go.) なのである。生徒・学生には、これを「must not は『... しないことが要求されている』ことから『してはいけない』という意味になり、don't have to は『... することが要求されていない』ことから『しなくてもいい』という意味になる」と説明すれば理解した上で覚えられるのではないだろうか。

現状を知るために、2004年発行の高校生向けの英語の参考書を通読してみたが、must not と don't have to の項をはじめ、各項目とも私が英文法を習った40年前とほぼ同じことが書いてある。日本の英文法教育は40年間、進歩していないのである。私たちは教育の質向上のために、語法研究や文法研究が発掘した新しい知見を吸収し、活用していく義務がある。

3.4 英会話教育への応用

日本では、英会話教育は外国人に任せている場合が多いが、日本人の立場に立った英会話教育が必要である。

私は、英会話の第一歩は覚えている表現(チャンク)を適切な場面で使うことから始まると考えている。チャンクとはその場面にふさわしい定型表現(unit)のことで、OALD(第7版)には次のような説明がある。

(28) A phrase or group of words which can be learnt as a unit by somebody who is learning a language.

逆に言うと、場面にそぐわない表現を使うとコミュニケーションが成立しなくなるが、これは初心者が外国人と英語で会話するときによく見られる現象である(例えば、I'm sorry. に対して

You're welcome. と答えることなど)。最近では、辞書学の観点からこのチャンクが注目されているが、語法研究は使用頻度の高いチャンクの選定に有効である。

私たちは語法を研究する場合に資料としてよくペーパーバック（小説）を利用する。小説には会話文が必ず含まれているわけであるが、よく使われている会話表現を語法研究の手法で分析していけば英会話教育に役立つ。会話のポイントは、「いかに適切な場面で（覚えている）適切な表現を使うか」ということであるが、小説は数々の状況を提供してくれ、それぞれの場合にどのような表現を使ったらよいかを教えてくれるからである。

チャンクを利用する場合、私たちはAという表現が使っている場面で「類似のBやCの表現は使えないのか」という疑問をよくもつが、そういうときはインフォーマントを活用すればよい。

例えば、May I smoke here? の受け答えとして、「Go ahead. や Sure. や Be my guest. は使えるが、Help yourself. は使えないのか」という疑問が生じたとする。インフォーマントに尋ねると Help yourself. は、「Can I borrow this dictionary?» “Help yourself.” のように、「何か物を提供するときに使い、単に許可を与えるときには使わない」という答が返ってくる。そうすると、「Mind if I use your phone?» “Help yourself.” のような場合は物を提供していないが、どのように考えたらよいのかという問題が改めて生じる。

私はこの場合は、物の「使用权」を提供していると考えたらどうかと思う。“Okay if I sit here?” “Help yourself.” の例も同じように「使用权」の提供と考えられないだろうか。⁶⁾

4 結論

本稿では、冒頭で、「語法研究を学問にまで高めるには何が必要で何を目指すべきか」という問題を投げかけた。結論として、私たちが必要とするのは、2.3節で述べたように、方法論的に生じる語法研究であり、目指すべきは、同じく、2.3節で述べたように、ネイティブ・スピーカーの無意識の解明である。ネイティブの無意識の解明には外国語として英語を学ぶ日本人による語法研究が不可欠の存在となる。

(1) の図との関連で言えば、語法研究は、ネイティブの無意識の解明を通して、文法研究・理論研究と相互補完し、「語法学」という学問を確立していく必要があるし、その築かれた学問を次に教育面（英文法教育・英会話教育）へ適用することによって、応用科学としての一面を兼ね備える必要がある。

注

- 1) ネイティブ・スピーカーに質問をすると、よく「そんなことは今までに考えたことがない」という感想が聞かれる。これは彼らがいかに無意識に言葉を使っているのかをよく表している。
- 2) 日本人は家族には「さようなら」とは言わないが、これも日本語を研究しているアメリカ人からの指摘である。「なるほど」と思う日本人が多いのではないだろうか。
- 3) as if については、柏野「as if の解剖」（準備中）で詳しく扱う予定である。

- 4) (21) はぼんやりと本を眺めていて「視線は本に向けられているが、文字は実際に目には入ってきていない」状態に言及している。
- 5) この (25) や先の (4) の事例を見れば分かるように、いわゆる「受験英語」というのは間違ったことを教えている場合がある。このような英語を身につけても、それは日本でしか通用しない、しかも日本人同士でしか通用しない、いわば「鎖国英語」であるから何の役にも立たない。「鎖国英語」は教える側の人間が研鑽を積まず、教えられたようにしか教えないことから生じる弊害である。
- 6) 柏野健次著『英語学者が選んだアメリカ口語表現』(2006、開拓社)は、このチャンクを中心に50の口語表現を集めて語法研究の観点から解説したものである。

参考文献

- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. Longman.
- Coe, N. (1995) *Grammar Spectrum 3*. OUP.
- 柏野健次 (1993) 『意味論から見た語法』 研究社。
- (2002) 『英語助動詞の語法』 研究社。
- Kashino, K. (2005) “Be going to and emotionality” *Journal of English and Cultural Studies* 41 pp.1-13 (Published by Osaka Shoin Women’s University).
- 柏野健次・吉岡潤子 (2004) 『エレメンタリー英文法』 開拓社。
- 久野 暉 (1977) 「英語圏における敬語」『岩波講座 日本語 4 敬語』 pp.301-331 岩波書店。
- Murphy, R. (2004) *English Grammar in Use*. CUP.
- Quirk, R. et al. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
- 鷹家秀史・林龍次郎 (2004) 『生きた英文法・語法』 旺文社。